2010／秋

季刊　福井県和紙工業協同組合

和紙だより

―越前和紙への提言―

■Nancy Jacobi（ナンシー・ジャコビ）
カナダ・トロントにて和紙店「Japanese Paper Place」経営。トロント大学英語教育課卒。高校教師を経て、英語教師として来日時、和紙に出会う。帰国後1982年トロント・西クィーン通りに日本の手漉き紙の魅力を伝えようと小さな和紙店をオープン。その後事業は発展・成功し、現在、日本各地の和紙産地を回り和紙作りを励ましながら、世界各国のアーティストや和紙ファンに日本の和紙を提供。世界的にも秀逸な素材である和紙の重要性を信じ、長年にわたって和紙アート展開催、和紙の現代アート収集や世界中で講演活動等を精力的に行っている。2008年には地元トロントで「ワールド和紙サミット」を開催。好評を博した。
http://www.japanesepaperplace.com

■ナンシー・ジャコビさん（和紙卸売販売会社経営）

「きちんと伝えれば持続的な効果をもたらす」

●ヒューマンタッチが人を感動させる

一九七五年、英語教師として日本で働いていた折、和紙を初めて見ました。東京の高円寺の文具店で買った白く柔らかい和紙が大好きになり、手紙で両親にも書いたくらいです。それは心を穏やかにしてくれると同時に元気にもしてくれました。和紙には、とても癒しの要素があります。

帰国後、一九七八年に「Japanese Paper Products」という名でビジネスを開始しましたが、すぐに私が力を注ぎたいのは、和紙でできた製品よりも、和紙そのものだと気付きました。それで、一九八二年には「Japanese Paper Place」と名前を変え、トロントの西の端に小さなお店をオープンしました。現在は、小売り部門は切り離して卸売りに専念し、倉庫・ギャラリー・教室・オフィスを含め一千平米の面積に、十三人のスタッフが働いています。

一九九三年にはひどい火事に見舞われ、収集した紙アート作品のすべて、所有していた建物や殆どの紙を失いました。しかし私が相当和紙に入れ込んでいたお陰で、再開することができました。お客様が私達のためにパーティを催してくれました。三百人もの人が駆けつけてくれて、店を再開するための資金集めをしてくれたのです。

カナダで、又世界中でなぜ和紙がかくも人を魅了するのかには、多くの理由があります。和紙の長い歴史や伝統は世界でも希有のことですし、未だに手で作られていて、現在でも世界中のあらゆる所で多くの人々に使われているものをあなたは他に思いつきますか？和紙はアーティストにとっても多くの性質を兼ね備えています。即ち、半透明で、吸収性があり、柔らかく、柔軟性があり、とにかく美しい。各々の紙は幾人もの人の手に触れられて出来上がります。栽培する人、刈り取る人、皮を剥ぐ人、煮る人、チリトリをする人、紙を漉く人、道具をつくる人、乾かす人、荷を送り出す人などです。機械ばかりの世の中で、幾人もの人間が触れてつくるこの「ヒューマンタッチ」が人を感動させるのです。

●アーティストに最上の和紙を

私達の取引先は国際的で、フィンランド、スウェーデン、トルコ、オーストラリア、イギリス、南アフリカ、ドイツ、イタリア、ポーランド、アメリカ、その他の国に和紙を送り出しています。主要なお客様はアーティストと修復家で、売り上げの八十％を占めます。品質のよい和紙を売るには多くの教育を必要とします。とりわけ私達西洋人にとって、和紙は洋紙とどう違うのか、どういう風に使うことができるのかは未だに難しいので、ワークショップは日常的に開催しています。今年七月にも地域の美術学校が一週間通しの和紙の使い方ワークショップを開催しました。毎日違った講師が来て、和紙が絵画や、ステンシル、コラージュなどにどのように使えるかを見せて教えました。そのうち一日はコンニャク糊や墨の使い方を教え、糊の作り方も見せました。生徒達の優秀作品はあとで、倉庫ギャラリーに展示し、オープニングパーティで作品を楽しみます。スター作家のトークショーなども作品の作り方が分かるので人気があります。

お店には、和紙を作品に使うための相談窓口「アーティストのための紙素材センター」が設置されています。予約制ですが、実際に和紙を見て、本やビデオで勉強し、和紙に詳しいスタッフがきめ細かく相談に乗り、テストができ、適切な和紙を買うことができます。最初は「最上の紙を使わなくても」と考えるのですが、私達はアーティストに試しに使ってもらうように、最上級の和紙の見本を無料で渡します。しばしば彼らは和紙に夢中になって、最高の和紙を使えば、彼ら自身の作品の価値が上がり、成功して売りやすくなるので、大きな価値を理解できたと私達に感謝するのです。

現在レンブラントの時代から現在まで、世界のアーティストは如何に和紙を使ってきたかという本を書いています。越前を何度も訪問した

Japanese Paper Place外観

「アーティスト紙素材センター」併設の和紙アートコレクション

たことのあるポール・デンホード氏が技術の章を書き、私がアーティストのための和紙の使用法について書く予定です。大変わくわくするプロジェクトです。

●ワールド和紙サミット

二〇〇八年六月に「ワールド和紙サミット」を一週間、開催しました。森木ペーパーや国際交流基金など多くの人の助力で、日本から三人の紙漉き職人を招待し、和紙制作の実演をやっていただきました。又彼らの和紙を実際に使っているアーティストとも交流してもらいました。トロント市内の四十のギャラリーや施設で、和紙のアート作品を展示したり、イヌイットの版画家による実演、日本から来た職人さん達が漉いた紙を直接販売するバザール、和紙のファッションショーも運営しました。イベントは大成功で皆さんがもっと和紙のことが好きになるのに一役買ったと思っています。現在は他のギャラリーや学校と協力し、毎年六月は「和紙月間」にして活動を続けています。旅が好きですので、和紙についてしゃべって欲しいと頼まれればどこへでも行きますし、できる限り、紙卸しのお客様の所を回り、和紙について話をしたり、和紙のコレクションを見せてあげます。とにかく、ずっと伝え続けることが重要なのです。

「ワールド和紙サミット2008」
-戸外での和紙職人実演会

「ワールド和紙サミット2008」
カタログとパンフレット

産地へのお願いは三つ

一、たとえ生き残るために、品質を落とした紙もつくらなければならないとしても、伝統的なやり方で、できうる限り質のよい和紙をつくることをどうぞ、あきらめないでください。

二、公的助成金等を活用すれば、海外へ出て、和紙を使い、和紙を愛している人に接することができます。日本の作り手に会い、どのようにして和紙がつくられるのかを見る機会は、後々彼らに持続的な大きな効果をもたらします。トロントにどうぞいらして私達に和紙のことを教えて下さい。

三、改良を続けて下さい。越前は水を使った技法や透かしなど、様々な技法ですばらしい紙をつくってきました。新しいアイデアをいつも考え続けて、時には色も使ってみて下さい。辛抱強くおねがいします。

ショップレポート

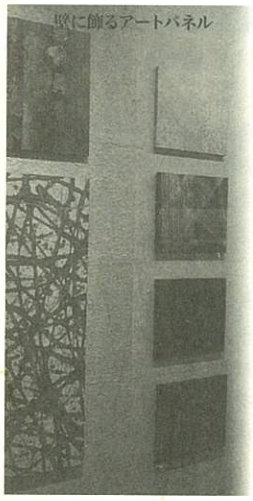
■「KAMISM」川島企画販売株式会社 高付加価値のインテリア和紙を伝統技法で

東京の問屋街、浅草橋と馬喰町の中間辺り、靖国通り沿いに「KAMISM」のショールームがある。会社名は川島企画販売株式会社といい、平成五年に創立された。「KAMISM」というブランド名は、「紙」と○○主義を意味するismを掛け合わせ、伝統的な紙加工技法で和紙を現代のライフスタイルに合わせてデザインし、オリジナリティあふれる高付加価値の和紙を空間演出の紙として提供していこうという意図を込めている。工房も含め、従業員は二十一名。代表取締役の椿野隆さんにお話を伺う。

●得意の紙加工技術から

もともと、紙を加工する技術が得意な点が当社の強み。加工工房もショールームから歩いて十分の所にある。納入先は、バー、居酒屋、レストランなどの店舗関係、ゼネコン関係、大規模商業施設、ホテル、旅館、マンション、注文住宅、など満遍なくあるという。リーマンショック以降、建築業界も大変厳しい状況が続いているが、顧客のキーマンである設計事務所やデザイナーは、自分の存在意義を施主やオーナーにアピールできる、特長ある素材やパーツを探しているという。こうしたクリエイターの要望に応えるには、従来からある手漉き紙や加工法では商品に広がりが出ず、差別化できない。小ロットでも、他にない個性やデザインのオリジナリティ、大量生産では出せない味のある和紙を、しかもモダンな空間にも合う形で提供できるというのが味噌。カタログは毎年発行しているが、基本的に商品は大量生産品ではなく、特注品、半特注品や創作和紙である。最終的には、壁紙のように加工した紙だけを収めるときもあれば、紙でしつらえたアートパネルなどの完成品を収めることもあるという。

「デザイナーや設計事務所の方から、こんな感じの紙が欲しいと早く宿題を頂いて、工房や企画の者と早く動いて、早く回答を提案することが重要です」と椿野さんは語る。



壁に飾るアートパネル

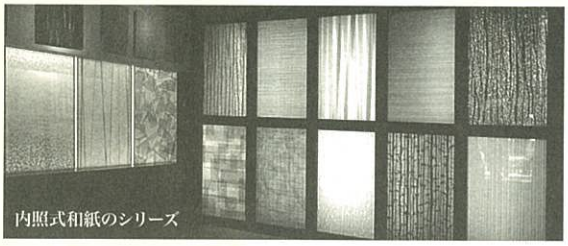
社長の椿野隆さん

●業務

紙加工の技術は伝統的なものが多く、はけ引き、砂子、木版、墨流し、揉み、引き染め、アーティスティックな模様を描いた墨アート、シルクスクリーン、などバラエティも豊富。機械では表現できない和紙独特の素材感と、手加工ならではの繊細さ、伝統を活かしたジャパネスクなセンス、最近では、湿度調整や再生可能性、保存性など、環境配慮という点が受けているようだ。商品ジャンルは、「壁紙和紙」、「パーテーション・障子・襖」、ガラスやアクリルに挟み中から光らせる「内照式和紙」、壁に芸術

的なアクセントを添える「墨アート」、和紙をパネル上のアート作品にした「アートパネル」があり、ホテルや店舗に高級感を醸し出す。従業員には、和紙の知識は当然だが、特に紙と色の相性等の加工法の専門知識をつけるように指導している。

また同社には、アメリカ、オランダ、香港、マカオ、韓国、タイなどに、海外提携販売店が数社ある。いずれも見本市やインターネットなどで見て、扱わせて欲しいといってきたところが多い。材料まで仕入れる設計事務所もあれば、建築家向けの素材販売商社のような所もある。


内照式和紙のシリーズ

●今後はさらに「もの＋人」の理念を強く

二〇二二年、世界一高いテレビ塔「東京スカイツリー」が、東京都墨田区に完成するのを機に界隈は再開発され、新たな東京の観光地としても期待が高まっている。同社は、手狭になった工房をこのタワーから五分くらいの所に今年秋頃、移転させる予定だ。一階に木版などの伝統技術が体験できる体験工房とショップ、二～三階は本業務の加工工房になる予定。

「ものだけでなく、こんな伝統技法で人が関わって作られている紙だということを知っていただき、KAMISMに来て頂いたお客様に少しでも幸せな気持ちになってもらえるような店作りにしていきたいです。」と椿野さんは抱負を語った。

漉き場探訪

■山次製紙所
「うちの工場をうまく使ってもらえたら」

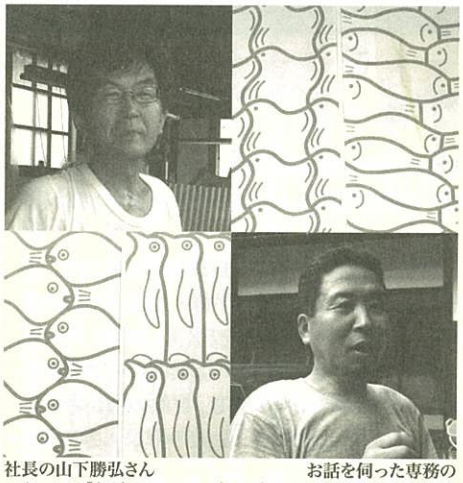
山次製紙所の名前は、創業時の職人名、山下次右衛門（やましたじおもん）から由来する。この地方では名前を縮めて屋号とするところが多く、ここでも山下の「山」と次右衛門の「次」を合わせ、企業化するときに「山次製紙所」と名乗った。創業は定かでないが、明治時代後期くらい。「優に百年は経っている事だけは確かです」と専務の山下善久さんは笑う。従業員は、社長の山下勝弘さん、弟の善久さん、おいの寛也さん、親戚のおじさん、おばさん、若い女性二人の七人が働いている。女性二人は、福井県が労働局などと協力し、若者の就職支援する取組「ジョブカフェ」の講習会を通して和紙の世界に入った。昔ながらの漉き場の雰囲気が懐かしさをそそる工房。専務の山下善久さんに得意技術や、現在抱える課題などについてお話を伺う。

●酒ラベル

現在、新酒の季節を迎えて仕事のピークを迎えている。以前は七月から十一月くらいまでは、酒ラベルとブライダル関係、カレンダー用の紙などで、フル稼働していたが、さすがにこの不況の影響も強い。得意の手漉き透かし技術を活かし、現在は主に洋酒や日本酒のラベル用紙を作っている。注文は、東日本でもトップクラスのラベルの印刷屋さんから、地場の問屋さんを通して、漉き場に来るというのが通常のルート。最近は洋酒にも和紙の風合いを持ったラベルが好まれ、従って印刷特性がよく、手漉きであっても厚さの均一性が要求される。洋紙に印刷すれば、輪転機に一日二千枚は通るが、和紙は千枚ごとに紙粉を取らないといけないなどの手間はある。しかしブランドに見合うラベルを、とこだわる酒造メーカーに本物の和紙が使われているという。透かしでちぎれるようにした紙に、くわえの部分を残して銘柄などを印刷するが、印刷された紙をちぎるのは実は手作業なのだそうだ。昔はちぎる作業は漉き場でやって、また送り返していたが、今は印刷屋さんの仕事となった。

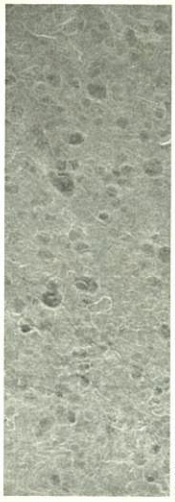
●日頃からネタを作っておかないと

産地問屋の杉原商店のヒット商品「ちぎって名刺」も透かしの技法を用いて、この漉き場で作っている。「ちぎって」シリーズには、丸や四角などいろいろなサイズや形もあるが、動物を型取った「ネイチャーシリーズ」もある。今までに、うさぎ、恐竜、トラ、牛、金魚、アサガオ、かえる、雲、ねずみ、犬、猫、あざらし、魚、ペンギン、千鳥、等のパターンを作った。使い方も贈り物のメッセージカード、自家製ジャムのラベル、一筆箋、モビールなど、工夫次第で個性あふれる使い方が出来て楽しい商品だ。


社長の山下勝弘さん　お話を伺った専務の山下善久さん
パターンは「ちぎって」シリーズの動物たち

最近は「浮き紙」という新しい技法を用いて、インテリア用のブロック壁紙にも挑戦している。図柄が立体的にエンボス状に浮き上がり、裏は平滑なので、施工にも都合がよい。現物の大きなブロックを持ち歩くわけにも行かないので、技法を見てもらうために、いわばキャンペーングッズとして、数種類の模様で葉書も作った。今秋全国公開される、当地が舞台の映画「ヘソモリ」のオリジナル葉書も鳥居の模様を浮き上がらせて作り、プロモーションのために使われます。

「浮き紙」の技法で制作した映画「ヘソモリ」キャンペーン葉書

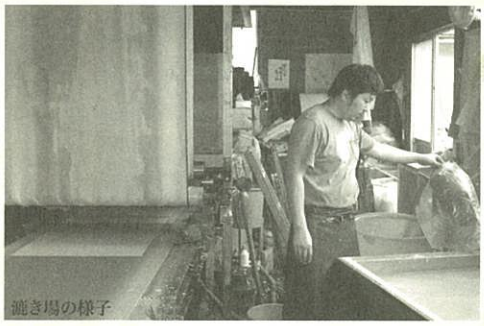

水の技法で制作したロール状の和紙

「デザイナーの方などは、うちのいろんな技法で作った紙を見ると、何に使ったらいいかなあと、俄然、創作意欲が湧くみたいですね。こういう新しいネタをいつもお見せできるというのが、一番大切なことだと思っています。沢山いろんな試作を作って提案しても、そのうち採用されるのは一点か、二点という時もありますが、とにかく、日頃からネタを蓄積しておくことを心に留めています。」

●リスクを分散して協力できる体制は？

「ジョブカフェを機に入った二人の女性にも、時間がある時には、自由に自分の好きなように作ってみてくれというのですが、ただしリピート可能で製法で、二工程まで、そんなに多くの時間がかからないもの、と条件を付けています。変わったことをしようとすると、だんだん凝ったことをし始めて、結果的に値段が上がってしまいます。やはりそこは適正価格をいつも意識して、リーズナブルな値段を付けられるように注意しないといけませんね。」

目下の課題は、いいアイデアがあってもそれを問屋さんなどと協力し、商品にまでまとめていく際に、開発や営業にかかる費用リスクを一社で負えなくなってきていることだ。「このリスクをうまく分散し、損しないような、うまい開発の仕組みが協力して作れないものかなあと思うのです。そういう動きを組合と協力して段階的にでも、作っていけたらいいですね。小規模な手漉き工房だからこそ、小回りが利いて、思いついたらすぐに作ったり、工夫することができるのは強みでもあるのです。何から何まで自前で行うのは無理ですから、うちの工場をうまく使ってもらえるようなところを増やして、信頼できる関係で組めるといいのですが…」


漉き場の様子

和紙ミニコーナー

■得意の語学力をいかして和紙の産地をプロモート

初めての木版画制作にみんなExciting!

今年七月、福井県内外の外国人などを対象とした「木版画教室」が卯立の工芸館で開催された。これを企画した青木里菜さんは、今号で紹介した山次製紙所で働く傍ら、フランス、ドイツ、中国などへ和紙見本を片手に現地で飛び込み営業も行う行動派。大阪外国語大学（現大阪大学）中国語科在学中、水墨画に魅せられ「杭州師範学院」に、卒業後には再び北京の「中央美術学院」に留学。絵だけでなく紙も勉強してみようと、帰国後、福井県にある越前和紙の里を訪れ、紙漉きの仕事を始めることになり、十年になる。

「海外で和紙の知名度は上がりつつあるものの、年々、越前のブランドイメージを対外的に発信する必要性を強く感じるようになりました。微力ながら私に出来ることは何か、常に意識して動いています。」

九月十九日～十月十日には、福井県内で英語を教えるアメリカ人と作品展示会「Looking in-日本との出会い」を開催。十月十六～二十一日には、中国から六人の美術教授などを招き、日中合同展示会、木版画、水墨画教室などを開催予定で目下準備に大忙し。

青木里菜Blog:
http://jiyomonwashi.blog134.fc2.com

情報欄

●イベント情報

■越前市市制施行5周年イベント
時：平成22年10月9日（土）・10日（日）
場所：いまだて芸術館（越前市粟田部町）
即売・パネルディスカッションあり

■越前和紙国際絵画アートフェスティバル
～世界に広がる越前和紙の可能性～
時：平成22年10月16日（土）～31日（日）
場所：卯立の工芸館（越前市新在家町）他
中国人作家による教室・展示・交流会

■平成22年伝産全国大会・伝統工芸ふれあい広場
時：平成22年11月3日～7日
場所：山口県　萩市
式典、墨流し実演・体験

■越前和ッショイいまだてin 和紙の里
時：平成22年11月20日～21日
場所：和紙の里（越前市新在家町）
ワークショップ他

●学校向け校外学習のご案内

平成21年4月から改訂された「新学習指導要領」では、新たな教育目標として「生命や自然の尊重」「環境の保全」「伝統と文化の尊重」等が揚げられています。

越前和紙の里では、園児・児童・生徒の皆様に、自然溢れる里山で、伝統産業について楽しみながら学べる、体験型校外学習・遠足プランの受け入れに対応しており、県内・北陸から延べ300校以上、6000人の児童・生徒さんに和紙の里に訪れて頂きました。豊かな環境の中で育まれてきた伝統工芸「越前和紙」に実際に触れていただき、自然の豊かさや大切さ、そこから生まれた素晴らしい技術と製品を、生徒の皆様に感じ取っていただけると思います。

詳細学習内容や体験プログラムやについては、パピルス館までお問い合わせ下さい。

Tel: 0778-42-1363
URL: http://www.echizenwashi.jp/information/gakusyu.html

編集後記

北陸本線を京都から北上すると既に紅葉が始まったかのごとく、山々のナラ枯れが目立ちます。南の虫「カシナガノキクイムシ」の被害が今年の猛暑で加速され、山が無残な姿になっているのです。材料にしろ、水にしろ、自然の恵みがあってこその和紙です。10月には、名古屋でCOP10（生物多様性条約第10回締約国会議）が開催されますが、和紙業界にとっても重要な問題だと思います。（よ）

季刊・和紙だより 第28号（2010年秋号）　発行日：2010年10月1日
発行人：福井県和紙工業協同組合　山田益弘　〒915-0234　福井県越前市大滝町11-11　TEL: 0778-43-0875　FAX: 0778-43-1142
編集所：右衛門佐美佐子事務所　〒606-8225　京都市左京区田中門前町90　TEL: 075-712-8834　FAX: 075-702-6223　E-mail: m-yomosa@smail.plala.or.jp
編集人：右衛門佐美佐子・田中裕子
※無断での転写・転載はお断りします。